

## 第2 教育研究団体の意見・評価

### ○ 全国歴史教育研究協議会

(代表者 高野 修一 会員数 約16,200人)

T E L 042-582-2511

#### 1 前文

平成30年3月告示の学習指導要領が令和4年4月に入学した生徒から年次進行で適用され、今年度入試は全面施行から2年目であり、共通テストでの歴史総合の試験は2回目の施行を迎えた。

歴史総合は「近現代の歴史の変化に関わる諸事象」を、「歴史的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる」ための「資質・能力を」育成するものである。その学習内容は、歴史的な見方・考え方を学び、問いを中心に構成する学習の重視、歴史の大きな変化に着目して世界とその中の日本を広く相互的な視野から捉える学習を行う点が特徴である。また学習内容を示す項目は、知識を身に付ける項目とそれに対応して思考力・判断力・表現力等を身に付ける項目からなり、両者を貫く主題を設定して学ぶことで一体的な理解に至るという構造である。以上の歴史総合の目標や内容、科目の構造に照らし合わせて検討していく。

#### 2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

資料の量や思考の過程の複雑さ、難易度を踏まえ、全体的にバランスの良い出題であった。出題の形式や場面設定なども授業や学校での学習活動を踏まえた作りになっているとともに、会話文やノートの記載など幅広い情報が掲載されており、歴史総合の趣旨に沿った出題が工夫されていた。

設問数は大問2問、小問16問であった。出題範囲は「近代化と私たち」から「グローバル化と私たち」まで幅広く出題されていたが、一部に歴史総合の学習範囲外であり、中学校での学習状況を踏まえた出題と思われるものが含まれていた。

出題形式でみると、正誤問題・語句の組合せ・正文組合せがそれぞれ3題、正誤の組合せ・用語と事項の説明組合せ・図版・説明を用いた組合せがそれぞれ2題、年代配列が1題と、バランスよく出題された。時代別では、時代区分横断の問題が5題で、直接ではないものの、歴史事象や人物の時期区分を考えさせる出題が多かった。重複を含めた個別の区分で見ると、「結び付く世界と日本の開国」が2題、「国民国家と明治維新」が7題、「第一次世界大戦と大衆化」が4題、「経済危機と第二次世界大戦」が2題、「冷戦と世界経済」が5題、「世界秩序の変容と日本」が4題となり、近代化と私たち・グローバル化と私たちからの出題が大半を占めた。

分野別ではほとんどの問題が複数の分野にまたがるとともに、日本史的事項と世界史的事項の融合も見られた。分野別にみると、日本史的事項に関わる政治が3題、社会経済が5題、軍事外交5題、文化が1題、世界史的事項に関わる政治が5題、社会経済4題、軍事外交9題で、文化からの出題はなかった。

地域別に見ると、アジア（日本も含めた東アジア・内陸アジア・南アジア・東南アジア・西アジア）アフリカに関する出題が7問（主に日本に関するものは3問）、ヨーロッパ（西ヨーロッパ・東ヨーロッパ・ロシア）に関する出題が2問、複数にまたがる出題が7問である。

以下、「歴史総合」の試験の各問について検討した内容を述べる。

第1問は世界史探究の第1問と共通問題。「人々にとっての様々な戦争経験」という生徒の調べ学

習を題材にした出題で、二つのパートから構成されている。

Aは「近代における軍隊と人々の関係」について考察するという場面設定で、会話文をもとにした出題である。

問1は空欄補充問題。空欄アは基本的知識であるプロイセン首相の名を問うものである。空欄イはフランスとドイツの徴兵制が国民国家の形成に伴い確立されたことを会話文から読み取るもので、時代を概観する表現を選ぶ。歴史総合の授業展開を踏まえた取り組みやすい出題であった。空欄アは具体的な政策やその時期を象徴する出来事で埋められると、歴史用語の暗記より歴史の流れや背景に視点をもつ必要性が強調できたであろう。

問2は正文選択問題。西南戦争において士族を徴集すべきかをめぐる政府内での論争について岩倉具視と木戸孝允の意見を読み取る。西南戦争や日本の徴兵制の正誤判別内容も細かくはないが、歴史総合の学習のなかで日本の内容だけを取り出した内容になっている。世界の他の国の政策と比較したり、世界情勢の影響を踏まえたりするなど、「世界の中の日本」という視点での出題を期待したい。なお、問題文に「前の会話文を参考にしつつ」と記載があるが、会話文には解答につながるヒントと考えられる文言は見当たらなかった。

問3は空欄ウで資料内の年代から19世紀の清仏戦争か、20世紀の第一次世界大戦を選ばせて、空欄エでは資料の要旨から戦争協力と権利の獲得を読み取らせる組合せ問題。既習事項と資料読み取りがバランスよく問われている。資料の内容が設問に十分生かされ、時代の大枠を把握する力とともに、抽象概念として読む力を問うという点で、良問であった。

問4は甲午農民戦争と同様の性格を持つ他の事例を表の情報から判断し、その事例が起こった地図中のおおよその位置との正しい組合せを選択する問題。歴史事象を比較する力を問う点で、受験者への示唆的な出題であった。

Aのテーマが「軍隊」とはいえ、4問すべてが「軍事」に関わる内容を直接に問うもので均衡を欠く。「軍事」が社会経済や文化的に及ぼした影響などを問うような出題があってもよかったであろう。

Bは「現代の戦争が各地の社会に及ぼす影響」について考察する場面設定である。

問5は風刺画を用いた正文組合せの基礎的な問題。空欄オは大西洋憲章に関する知識を問うものだが、誤りの内容がやや極端である。また、風刺画から読み取れるものとしてX・Yの選択があるが、風刺画から読み取るというより、第二次世界大戦前後の欧米諸国の考え方として問うた方が適切であろう。風刺画の「お前らはまだだ！」という情報だけでは、「白人」が先で「有色人種」が後、とも読み取れ、「植民地支配から解放することに否定的」まで確実に読み取ることは難しい。

問6は日本とアメリカ合衆国における女性の労働についての基礎的な正文選択問題である。選択肢は資料とグラフの読み取りが主であるが、一つだけが知識を問う文になっている。1920年代に女性が政治に参加している様子を読み取れる資料などを提示し、資料読み取りを主とした問題にすることも考えられる。また、①は1945年11月という時期でまだ選挙は行われておらず、日本には女性議員は存在しない、という点から正誤を判断するが、戦後初の衆議院選挙の時期は、歴史総合の学習としては詳細な事項であろう。「日本は、戦後の民主化政策の中で男女普通選挙が実現した」というような、歴史を概観する中で正誤を判別できる出題のほうが適切であったと思われる。

問7は三つのメモを用いた基礎的な年代整序問題で、大きな時代の流れを確認する出題で、細かい年代の知識ではない思考過程が想定されていて良問である。

問8は「現代の戦争が人々に与えた影響」という探究課題と、それに用いる資料の組合せを問う。用いる資料を課題と資料の関係性という視点で選ぶのではなく、探究する課題の内容と資料の年代のずれに基づいて答えを選ぶような思考過程になってしまっている。同じ時期の視点の異なる資料

など、誤選択肢に工夫が加わると、探究活動や授業内での学習の経験値を測れるであろう。

大問2は「歴史における旅とその役割」という探究学習を題材にした出題で、三つのパートで構成された。会話文パート・パネル・図表からの読み取りが中心となったが、本試験の問題に比べると、より確かな知識を求める出題が特徴的である。

Aは「宗教と旅」がテーマで、博物館見学という場面設定がなされた。

問1は、江戸時代の伊勢参りに関連する正誤問題。資料を活用して正誤を判断する問題であるが、資料の読み取りのみで正答が導ける内容であった。教科の特性に鑑みれば、知識と読解のバランスのとれた出題をお願いしたい。なお、旅程例のなかに旧国名が情報として出されている。名所が「広範囲」に及んでいたか否かにとどまらない活用方法もあったのではないだろうか。

問2は、18・19世紀のメッカ巡礼に関する資料文に関する語句の組合せ問題。空欄アは18世紀末という情報だけで「ナポレオン戦争」を読み取る必要がある。ナポレオンのエジプト遠征に関しては記載のない教科書も存在しているため、受験者には厳しい出題である。空欄イは資料文の内容だけで解答できる。史資料の読み取りに終始しない知識活用の手立てがあるとなお良い出題であった。

Bは「指導者の旅」というテーマで、生徒と教員との会話という形をとっている。

問3は、イブラヒム（アブデュルレシト・イブラヒム）の通過した都市（Ⅰがイスタンブル、Ⅱがハルビン、Ⅲが東京）を、地図を確認しつつ、通過した順序に正しく並べる配列問題。この問題で正答するには「ハルビンの位置を正確に理解していること」「孫文が中国同盟会を結成したのが東京であったこと」を知っている必要があるが、いずれも歴史総合のみ、あるいは日本史探究を学習した者には難しい。またイスタンブルを「スルタンの専制政治を倒す立憲革命が起こった都市」と説明しているが、青年トルコ革命が始まったのはサラニカ（テッサロニキ）である。イスタンブル自体も青年トルコ革命の舞台となった都市ではあるが、説明文に若干の違和感を覚える。それぞれの歴史事象を知識だけではなく地理的な視点で考え直させ、空間認識を問う問題という意味では良問であった。

問4は、語句と正文の組合せの正しいものを選ぶ問題。空欄ウについては1913年という時期から判別できるが、資料の選択は難しい。ノート1の読み取りから「英・露」の取り決めに基づいた資料を選ぶ、という視点で、「香港のことを述べているX」ではなく、「イランのことについて述べているY」を選ばせる問題になっている。資料Yの文章が、英露協商におけるイランの分割に関する規定の内容であることを、受験者が知識として理解していることが前提となる出題である。歴史総合の出題という観点で見たとき、空間的な認識が求められていると言えるが、思考よりも知識をより強く問う内容でもあり、難易度が高い。

問5は王族・皇族の訪問の事例について述べた四つの資料文について、正しく説明したものを選ぶ正文問題。資料文「い」の第3次日韓協約は、歴史総合のみの学習者には難しい内容であるが、選択肢の文章と資料文とを注意深く見比べれば、正答を導くことはできる。歴史用語の知識だけではなく、概要をまとめ、比較することで相対的な位置づけを行い、歴史の見方・考え方について考えさせる、示唆的な出題であった。

Cは「現代社会における旅」で、授業後にグループで調べを進めるという状況設定であった。

問6は表の読み取りを伴う正文組合せ問題。表内の数字について、割合を基に概数を計算する必要があり、資料読み取りの能力を測る出題である。しかし、神武景気の時期や、日本の国民総生産が資本主義陣営で第2位となった時期など、判別の根拠が西暦年代のみであり、判別の助けとなるような資料があるとよりよい出題になったであろう。

問7はプラザ合意やヨーロッパ連合に関するノートを素材とした正文選択問題。資料の読み取りとはいえ、実際は知識を問う出題になっている。為替相場の変化のグラフや、海外旅行に出る日本

人の増減のグラフなどの資料読み取り要素を，思考の過程に含めることも考えられよう。

問8は問1から問7までの資料文・パネル・図表・ノート・会話文の内容を踏まえた正文選択問題。メモ1・2ともに，ここまでの学びを抽象化し表現するという点で歴史総合の学習に沿った出題である。しかし，現状の問い方では単純に読解力のみが求められる。メモ1・2でまとめたうえで，新たな歴史的事象との比較や現代の国際情勢などと比較する形式になると，歴史総合の趣旨に沿う出題になったであろう。

### 3 総評・まとめ

現行の学習指導要領に基づく共通テストも2年目を迎えたとはいえ，新科目の歴史総合としてはいまだに現場の授業レベルでは手探りの状態が続いている。受験者の数が限られるため平均点や全体のバランスを客観的につかむことは難しいが，本試験と同様に資料を活用し，基礎的・基本的な知識を合わせて思考を求める問題が多く，受験者にとっても取り組みやすかったと考えられる。テーマ設定が前提となって問題が展開するあまり，一部の領域に出題が集中してしまう傾向があるので，来年度はテーマを一貫する中で，派生する出題分野のバランスの良い出題をお願いする。また，受験者が少ない中でも平均点などのデータがあったほうがより建設的な分析ができると感じる。改めて，平均点などの情報開示をお願いする。